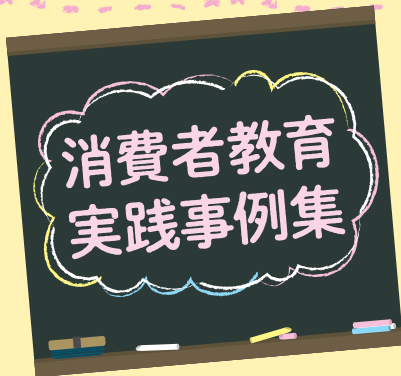


オーダーメイド授業で 「誰一人取り残さない」試み

—特別支援学級・学校における体験型金銭教育

早川 聖乃 Hayakawa Kiyono 名古屋市消費生活センター 消費者教育コーディネーター
新聞社勤務を経て、2016年8月から名古屋市消費生活センター消費者教育コーディネーターとして勤務。学校等における消費者教育に取り組む



名古屋市消費生活センターの消費者教育コーディネーター派遣事業

名古屋市消費生活センターは、2016年度から学校における消費者教育を推進する「消費者教育コーディネーター派遣事業」に取り組んでいます。学校と調整を図る校長OBと、2名の消費者教育コーディネーターが1チームとなり、派遣依頼のあった幼稚園・保育園、小中学校、高等学校、特別支援学校等に出向き、外部講師として授業支援を行っています。

2020年度までの5年間で約450回の授業、講座に派遣され、延べ1万700人余りの園児、児童、生徒の消費者教育に携わりました。そのうち、特別支援学級、特別支援学校からの依頼が4分の1を占め、特別支援教育現場での消費者教育へのニーズの高さを実感しています。

「誰一人取り残さない」ための試み

1. 個々の特性に応じた授業を作成

対象の年齢や障がいの有無にかかわらず、コーディネーター派遣事業の土台にあるのは、生きていくうえで必要な消費生活の力を身に付けてほしいという思いです。特別支援学級・学校の授業で軸になるのは、体験型の金銭教育です。買い物体験学習を主体に、まずは、お金の大切さや役割を理解して使えることをめざし、そこから大切なお金を守る意識につなげます。

特別支援学級では、障がいの種類、状態がさまざまな児童が机を並べています。誰一人取り残さない授業のためには、個々の特性に応じた目標設定や理解を助ける仕掛けが必要です。そ

こで、派遣授業実施1カ月前に、授業を参観し、児童の実態把握に努めます。その後に教員から授業全体や個々の児童の目標など要望を聞き取り、授業案を作成して提案します。結果的に、毎回、授業はオーダーメイドとなります。

2. 授業の具体的な内容

個々に応じた学び、体験の場を実現するための特徴的な取り組みを3つ紹介します。

① 同時並行で異なる授業

1つ目は、「同時並行で異なる授業」です。特性や学年、生活経験の違いなどによって、2つのグループに分け、別教室で同時に、内容の異なる授業に取り組む方法です。

例えば、A小学校では、1人のコーディネーターが修学旅行前の6年生を対象に「修学旅行のお土産を買おう」の授業に取り組み、もう1人のコーディネーターが低学年を対象に「遠足のお菓子を買おう」という授業に取り組みました。

「修学旅行」の授業は、実際に持参する小遣いと同額の予算で、土産を買う疑似体験です(写真1)。児童は誰に何をかうか計画を立てて買い

写真1 「修学旅行のお土産を買おう」の授業で土産を選ぶ児童



物し、小遣い帳に記録しました。店員とのやり取りや支払いの動作など一連の流れを練習するねらいもあります。

「遠足」の授業は、人形劇でお金が無いと買い物ができない場面を演じ、お金の役割や金種の違いを学んだ後、300円以内で遠足に持って行くお菓子を買う体験をしました。

同時並行の手法は特別支援学校高等部でもよく行います。例えば、買い物経験が少ないグループは、コンビニを模した店舗での買い物体験主体の授業をします。並行して、買い物経験が豊富なグループは、金銭管理の必要性を学習した後、勧誘を断る場面のロールプレイングなどで、大事なお金を守るスキルを学びます。

②スモールステップの積み上げ

2つ目は、「スモールステップの積み上げ」です。同じ学校に毎年出向き、児童の成長に合わせて、段階的な授業を展開します。例えば、B小学校では、初年度「お金ってなあに」の授業でお金が無いと買い物できない、お金は使うと無くなるという基本を学習し、次年度「値段を知って買い物をしよう」の授業で、商品には値段があり、値段を見て、持っているお金で足りるように買うことを学びました。さらに3年目には「ファストフード店で昼ご飯を買おう」の授業を行い、予算の範囲で目的に合った買い物をすることに挑戦しました。

③学校行事との連動

3つ目は、「学校行事との連動」です。修学旅行や校外学習などの行事の事前学習として実施し、学びを深めます。例えば、C小学校では、レストランでの外食体験の前に、教室に模擬レストランを設けて、注文の仕方、お金の払い方を疑似体験し、当日、落ち着いて行動できるようにつなげました(写真2)。

教材やワークシートの工夫

授業で使う教材は児童・生徒の意欲、関心を引き出し、体験自体がスキルを身に付ける機会になるように、本物や実物そっくりのサンプル

写真2 「レストランで食事をしよう」の授業で注文した料理を食べるまねをする児童



を用います。例えば、模擬パン屋での買い物は、弾力ある素材でできた食品サンプルのパンをトングでトレーに載せ、本物のレジで会計します。

また、ワークシートは、定型化せず、特性に応じて作成します。例えば、文字を書くのが苦手な児童には、お金型のシールや商品シールを貼ることで、視覚からの理解を促します。

「場の喪失」を補う「場の創設」

授業後の教員からのアンケートを見ると、「皆がそれぞれ学びのある時間だった」「児童から楽しい、もっとやりたいという言葉が出る授業だった」といった声が寄せられ、手応えを感じています。

一方で、きめ細かなオーダーメイド授業を可能にしている学校派遣に特化したチーム体制が、厳しい財政事情のなかで、今後も持続できるか不透明という現実があります。将来につなげる方法の模索が課題の1つとなっています。

また、コロナ禍で子どもたちの生活体験の機会が減っています。日常の買い物は金銭感覚を育む実践的、体験的な学びの場ですが、少人数で買い物に行くよう要請され、店舗で見掛ける子どもは以前より少なくなりました。特に経験からの学びが大きい障がいのある子どもたちにとって、体験の場の喪失は深刻です。今こそ、工夫を重ねて教室に体験の場を創り、届けたいという思いを強くしています。